

“機関銃要塞”の少年たち

ロバート・ウェストール作
越智道雄訳

評論社

NDC 933

302 p

201 mm × 150 mm

商標登録番号 第852070号 登録許可済

児童図書館
文学の部屋 “機関銃要塞”の少年たち

昭和55年12月20日 初版発行

定価 1,300円

訳者 越智道雄

発行者 竹下晴信

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 評論社

(〒101) 東京都千代田区神田神保町2-16

電話代表 (265) 1961

振替東京 8-7294

〈検印省略〉

落丁・乱丁本は本社にておとりかえいたします。

(A-1)

“機関銃要塞”の少年たち

ロバート・ウエストール作 越智道雄訳

THE MACHINE-GUNNERS

by

Robert Westall

Copyright © 1975 by Robert Westall
Japanese translation rights arranged with
Macmillan London Ltd., through
Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo.

この作品の生みの親でもあった
わたしの父と母に

もくじ

1	奇妙なコレクション ^{きみよう}	9
2	ハインケル爆撃機 ^{ばくげきき} の残がい.....	23
3	最高のコレクション.....	40
4	危険 ^{きけん} きわまりないおもちゃ.....	53
5	国防市民軍.....	60
6	“要塞 ^{ようさい} ”作り.....	80
7	“カパレット―要塞 ^{ようさい} ”.....	140
8	ルフトヴァッフエ〔ナチス〕軍曹 ^{ぐんそう}	159
9	さまようルーディ.....	172

	10	まいこんできたナチス	186
	11	“要塞”での共同生活	193
	12	尾行者	220
	13	クロッガーのすごさ	230
	14	かたみのボート	239
	15	ガーマス“侵略”	244
	16	検問	259
	17	銃撃戦	283
	18	苦い終わり	290
		訳者あとがき	301

“機関銃要塞”の少年たち

1 奇妙なコレクション

チャスが目をさましたとき、防空ごうのなかは静まり返っていた。入口のカーテンに陰気な冬の光がまつわりついている。なん時ともいい切れない明るさだ。母はいなくなっていた。それと保険証書や救急用のブランデーを入れた茶色の小さなアタッシェ・ケースも消えている。広場をまわってくる牛乳売りの車の音が聞こえた。きっと空襲警報解除のサイレンが鳴ったのにちがいない。

かれは頭をすりむきながら防空ごうを出て、注意深くあたりを見まわした。なにも変わったところはない。おなじみの牛乳売りがいつものように口笛を吹いている。かれの車もいつも見なれたものだ。だが車につんだ牛乳びんの数がいともより多すぎる。これはよいことではない。びんが二本でもふえるごとに、どこかの家族が前夜のうちに爆撃で焼けたことになるのだ。

チャスは裏口へまわった。母が灯油ストーブをつけて、パンを揚げていた。その匂いがかぐとホツとした。窓ガラスがまた二枚割れている。父がそのあとをネスル牛乳のボール箱でふさいで

いた。ボール箱にすられた字がきちんと上を向くように、窓わくへはめこんである。父はそういう点にうるさかった。

父は一バイント入りの専用の紅茶カップを持って、ストーブのそばにすわっていた。つかれた顔つきをしてはいたが、それでも警防団〔空襲警備の任務につく人〕の制服をきちんと着こみ、肩つりの下へベレ一帽をたくしこんでいた。

「八百屋の娘っこ覚えてるかいい？」

「しょうが色の髪の毛したほう？」ストーブの上にかがみこんだまま、母が聞き返した。

「そうだ。直撃弾さ。あのこのからだ半分が前庭で見つかったのに、残り半分は向かいの家とのあいだに落ちてたんだぜ」

「あのこは防空ごうへ待避したってなんにもならないって考えだったのよ。ごうのなかで生き埋めになるのがこわかったのね」母が肩を丸めているようすから、チャスはかの女が泣くのをこらえているのがわかった。

父がチャスのほうに顔を向けた。

「おまえのウサギはみんな大丈夫だぞ。チニーの敷ワラのなかにガラスの破片がちよいとびこんでいたけど、おとうさんがどけといたから。でも温室のガラスが六枚も割れちゃった。この調子だと、今年のクリスマスには菊の花が拝めないかもしれないな」

「菊なしじゃだいなしだわね」と、母がいった。きゅっと結んだくちびるが、かすかにふるえ

ている。「さあ、ごはんですよ」

チャスは元気をとりもどした。うす切りにしたパンを数枚丸ごと揚げたやつに、ほんのりピンク色をしたソーセージのかたまりひとつ。へんな味だ。戦争前のソーセージとは似ても似つかない。しかしかれは、そのへんな味すら好きになり始めていた。両親の話を聞きながら、チャスはだまりこくって食事を続けた。かれが口をきかないと、親たちはすぐに息子がかたわらにいることを忘れてしまう。口をはきみさえしなければ、おもしろい話の聞ける確率ははるかに高い。

「ゆうべこそもうおしまいだと思った、ほんとよ。あの急降下爆撃機……もろにうちの防空ごうの上へ着陸しちゃうかと思った……。スボールディングのおかみさんはいつもの発作を起こすし」

「あれは急降下爆撃機じゃないよ」父がいかにももの知りらしくきっぱりした口調でいった。「双発だったもんな。屋根すれすれに降りてきたのは、RAF〔大英帝〕の戦闘機が一機くらいさがつていたからさ。すぐ後ろにくいついていたな。機銃弾のとびだすのが目に見えるくらいだった。そしてどうとうやつつけちゃった。テキはチャートンの古くからあるクリーニング屋の上へつい落したのさ。爆弾をしこたまつめこんだままな。一マイルはなれていても熱で顔があつくなくなったほどだ」母の顔は恐怖で凍りついていた。

「死者はゼロだから心配するな。あのクリーニング屋はなん年も前からあき屋になってたんだ。ちようどよかったわけさ——ほとんど跡形残らずけしとんじまったもの」

チャスははいねいにサイの目に切り刻んでおいた揚げパンの最後のひと切れをたいらげると、期待を顔に現して父に目を向けた。

「行って見てきていい？」

「ああ、いいとも。でも、あるのはレンガぐらいのもんだぞ。なにかもけしとんじまったかな」

母は心配そうな顔になった。「行かせないほうがいいんじゃない？」

「行かせてやれよ、かあさん。なんにも残っちゃいないんだから」

「不発弾は？」

「だいじょうぶ、こんやはまったく静かなもんさ。友軍機がいっぱいとんでるからな。だから高射砲の音がちっとも聞こえないのさ」

「古い買物かご借りていい？」と、チャスが聞いた。

「いいと思うけど。でもなくさないでね。それからいつもみたいにガラクタを家のなかへ持って帰らないこと。まっすぐ温室へ持ってってちょうだい」

「学校はなん時だ？」と、父が聞いた。

「十時半。空襲があったのは真夜中すぎだもんね」

戦争中にも少しはいいことがあるものだ。

チャスはガーマス〔インクランド北東部ノースランバランド州南東〕でも二番目にいい戦争コレクションを持っていた。いいコレクションを集めるには、どこをさがせばいいか心得ておくことがかんじんだ。ほかな子供たちは舗道か溝のなかに目をつける。まるでそういう場所が爆撃直後にさらえられてしまったりしないかと思ひこんでいるらしい。一番いい目のつけ所は、ほかの連中がだれ一人夢にも思いつかないような場所、たとえばいぼたの生け垣の根元の乾いた土の上などだ。そんな所にはよく機関砲弾が地面にぶつかつた衝撃で金属の小さなきのこみたいにつぶれて転がっている。まのぬけた連中には、生け垣からそんなものが落ちてくるなど思いもよらないのだ。

歩きながら、チャスはいたる所に目を配っていた。マーストン・ロードの角では、舗道が一ヤードばかり焼けただれて白っぽくなっていた。焼夷弾だ！ 爆弾の尾びれがどこか近くにあるはずだった——ふつう地上で炸裂したとき大きくはねとばされるのである。

かれは前庭で尾びれを拾いあげると、上着にこすりつけて汚れをぬぐった。上等のしろもので、曲がっていないばかりか、暗緑色の塗料がはげてすらいらない。しかし、このたぐいの品物なら、かれはすでに十個も集めていた。

ボッサ・ブラウンなどは十五も持っている。ガーマスではこの種のコレクションでボッサになう者はいない。もっぱらのうわさだった。ボッサが怪三・七インチの高射砲弾の弾頭を見つけてくるまでは異議をとねえる者も少しはいたけれど、それいらいだれ一人文句をいう者はいなくなった。

チャスはため息をつく、尾びれをバスケットにしまった。こんなもの百個集めたところで、弾頭一個に太刀打ちできるものではないのだ。

そこへ着かないうちから、かれには古いクリーニング屋にはめぼしい品などありそうもないと見当がついていた。飛行機の破片は目につき始めていたけれど、ただのアルミのかたまりで、両面が黒くすすけ、縁がピカピカ光って、びしょぬれの紙みたいにくしゃくしゃになっている。コレクションとしてはなんの価値もない——かれの仲間はケラケラ笑って、おまえんちのやかんでも切りとってきたんじゃないのかなどとひやかしたものだ。アルミに番号かドイツ語でもついていないと、いやできたら……。チャスは胸のつまる思いでため息をついた。ほんもののスワスティカ〔ハーケン〕がついていれば。だが、ここに転がっているのはただの黒ずみ銀色に輝く破片にすぎなかった。

つい落の現場はせいさんながめだった。チャスの目をひいたものは——五階の壁面がぐずれて、なかがむきだしになった内壁にまだにかかっている絵の額縁、いまにも倒れそうになりながらろうじてバランスを保っているエントツがいくつか——だがクリーニング店のほうは区の破壊班がとりこわしたあとのように、完全にぺしゃんこになっていた。いくつものレンガの山と爆撃機のエンジンが二基転がっているばかり。

エンジンのひとつは、窓が吹きとび天井がぬけ落ちた区役所の前庭に転がっている。焼けだされた家族が、こわされた巣からはいだしてくるアリみたいにあたふたとかけまわって、がれきの

下からひっぱりだした家具類を山と積みあげては、またそれらをくずしてべつな場所へ積みかえていた。チャスはかれらが実際にアリであるかのように無情な目つきでながめていた。なにしろスラムに住んでいる連中なのだ。上ばきスリッパで走りまわっている太った大女、年の順に釣合いのとれた大きな男の子たちがわんさという。髪の毛たるやまるで便所ぼうき、えび茶色の粗悪なメリヤスセーターは首がゆるみきっており、ブーツのかかとは金が打ってあった。

チャスが庭のへい越しにのぞき見を続けていると、女がとっ手のとれたしびんを中身がこぼれるのもかまわず片手にかかえたまま、戸口に立ち止まった。

「いいかげんにのぞき見なんか止めちまいなよ。このろくでなし！　ほかにもっとましなことがあるだろ」

「エンジン見てもいい？」チャスは当てにせずに聞いてみた。

「だめ。ありゃうちんだからね」

「そんなことあるもんか——航空省のものになるんだよ。法律で決まってるんだから」チャスの口調は自信ありげだったが、気合いがはいっていなかった。

「違うよ。うちは家をこわされたんだからね、当然うちのものさ。とっとと消えちまいな、ぐずぐずしてたらカスバートに追っばらわせるよ」

便所ぼうきみたいな髪の毛をした連中のなかではいちばん大きな図体のカスバートは、ふいに面白いという顔つきになって、石ころを拾いあげた。ほかの便所ぼうきどもが、ずらりと突撃隊